

北杜夫による北杜夫

Horio

試みの自画像・5

北杜夫による北杜夫

©1981

1981年5月25日 初版第1刷発行
1982年10月15日 初版第4刷発行

定価 1250円

著者 北 杜 夫

発行者 葛 西 良 員

大明印刷/大口製本

装幀・渡辺英行/カバー写真・百瀬恒彦

発行所 東京都文京区 株式会社 青銅社
小石川5-38-9 会社

電話(03)815-9786 振替東京1-7679

試みの自画像①

北杜夫による
北杜夫

青銅社版





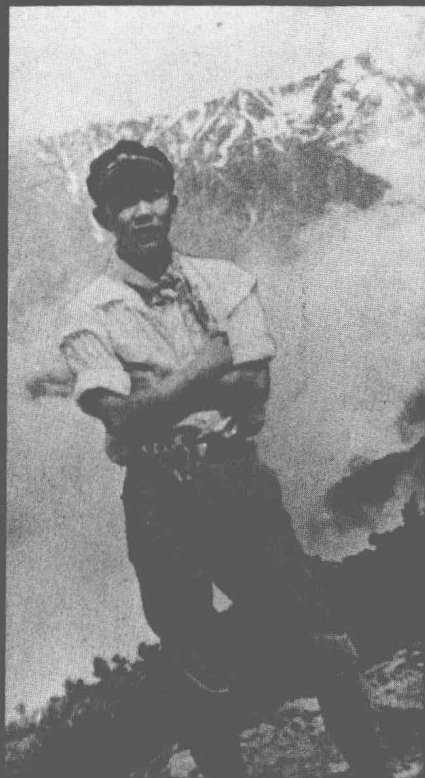
3,4歳の頃。母輝子、兄茂太、姉百子と。



『榆家の入びと』の背景をなす青山脳病院。大正13年に全貌。



青南小学校5年。多摩川にて。



昭和20年7月。西穂高にて。



昭和20年。松本高校に入学。



松本高校思誠寮の押入れの床に今も残る号「暴行」。



昭和27年、父茂吉、兄と、浅草にて。これが父の最後の外出となった。



昭和34年2月「マンボウ航海」の途次、ハリにて。辻邦生氏撮影



昭和35年、「どくとるマンボウ航海記」刊行の頃、東京湾のマクロ船にて



昭和36年4月。横山喜美子と結婚。後ろは仲人の河野与一氏。



昭和35年7月。芥川賞授賞式にて。



昭和35年。芥川賞受賞の頃、寄寓していた兄の家にて。



北杜夫による北杜夫

1927
昭和2年
0歳

五月一日、東京市赤坂区青山南町に、父齋藤茂吉、母輝子の次男として生まれる。本名は齋藤宗吉。父茂吉はアララギ派の歌人で、青山脳病科病院院長であった。十一歳年上の兄茂太と二歳年上の姉百子がいた。昭和四年十月、妹昌子生まる。昭和六年ころから、病院の隣りにあった原っぱで、夏はトンボやバッタとり、冬は凧あげに熱中する。昭和七年 幼年時代、病弱でしばしば発熱しているが、ことにこの年は、風邪、腸の急性中毒、百日咳などで寝こんだ。昭和八年十一月、母輝子は別居して、昭和二十年までつづく。

幼少期の記憶はごく少ない。

……最初の記憶と思われるものは、丈の長いヒメムカシヨモギの一面に生い茂ったなかのほそい土の道にいたことである。中心が黄で花弁の白いこまかい花をつけるこの雑草は、明治のころ渡来したので明治草とも呼ばれた。焼跡などに殊さらに繁茂した。

祖父の建てた相当に大きな脳病院は、震災の翌年に、失火により全焼した。その跡にヒメムカシヨモギがはびこりだしたのである。

とにかくその丈は、幼い私の背よりも高い。のびあがると、辛うじて向うが見える。そして焼失後のバラック建ての貧相な診療所と、横の道をおそらくは看護婦らしい白い服を着た女の人が歩いてゆくのが見える。——これが私の最初と思える記憶である。

もう一つ、これは自分でよく覚えておらず、あとで大人から聞かされた話のようだが、絨緞じゅうたんの

敷かれた暗い階段をのぼってゆき、父と母の部屋のある二階で、長い物指を口にくわえて歩いて
転び、口中だか喉だかを怪我をして出血したということがあった。二歳のときのことで、こちら
のほうがヒメムカシヨモギの記憶より古いものかもしれない。
〔原っぱ・墓地・書物〕50・6〕

私の最初の登山。むかし私の生れた家の敷地内に、地上五メートルほどの小山があった。半分
は土で、半分は石炭がらであったように憶えている。春には一面にフキでおおわれ、フキノトウ
が萌えだした。私がいよいよ小さいころ、私の兄が一本の旗を作り、一種の図案をかき、これは
シゲタ国の国旗であると言った。シゲタというのは兄の名前である。そして、あの敵の小山を占
領して、この国旗をかかげるのだと言った。兄と私は匍匐前進をし、フキのかげで敵弾を避ける
動作をしたり鉄砲をうつ動作をしたりして、ついに頂上に旗をかかげることができた。地上五メ
ートルとはいえ、周囲ははるかに低く、山の頂上に立つことがどれだけ素敵かということを私に
認識させてくれた。
〔山登りのこと〕40・8〕

キングコングは評判の映画で兄がそのあら筋を語ってくれた。なんでも途方もない化け物のよ
うなゴリラが出てくる由だ。そう考えただけで、私の胸は痛いほどどろいた。

その日は、母も兄も姉もいたようだったから、珍しく家族の大半がうちそろって映画を見にい
ったようだ。

むかしの映画には、ニュースとか漫画などが幾つもついていたように思う。パラマウント映画
かなにかの見慣れた画面が映り、いよいよ「キングコング」かと思っていると、それはまたニュ
ースなのであった。

そうしているうち、私の昂奮は次第に高まり、自らの空想のうちに、まがまがしい恐怖と変じていった。それで、いよいよ「キングコング」が始まると、まだ物語の発端で小猿さえもが出てこないうち、私はワッと泣きだしてしまった。

こういうとき、母はすこぶるきびしい。私をなだめるどころか、即座に廊下へ追いだしてしまった。女中がいたようにも思うし、案内嬢の一人が私をあやしてくれたようにも思う。とにかく私はずいぶん泣いていて、泣きやんだあとも、映画を見に席に戻るとはこわくてできなかった。そのうちに姉が出てきて、「大してこわくないから大丈夫よ」と言うので、私は暗い場内へはいっていった。

映画はもう終りの場面だった。キングコングがエンパイア・ステート・ビルに登りだすところで、途中で美女を一人さらい、さて頂上に着くと飛行機隊がやってくる。コングは飛行機を叩き落したりするが、結局、無数の機銃弾を打ちこまれ、あえない最期をとげる。

ほとんどこわくなかったし、コングがむしろかわいそうであった。しかも肝心の部分を少しも見ていないので、あとで惜しくってたまらなかった。それよりも、「キングコングを見て泣いた」という評判が、それから長いこと私につきまとい参った。

私に言わせれば、「コングを見て泣いた」のではなく、「見ないで泣いた」のであって、画面のコングより、私の幼い空想の中のコングのほうがすごかったわけである。〔キングコング〕42・6)

むかし力士の中でも巨漢で有名であった出羽嶽文治郎は、私の祖父の養子とされており、従って私のおじさんに当る、とずっと思ってきた。

しかし、事実は祖父と同郷の斎藤某の養子と戸籍上はなっている。むろん祖父のやったことで

ある。

角力好きの祖父が同郷のこの怪童を自宅にひきとって、医者になりたいというのを、ようよう説得して出羽海部屋に入門させた。一時は関脇まで行った。

その後、膝の故障などあって、私の子供時代にはとうに幕内から転落していた。場所ごとに番付表がきたが、ずっと下のほうにごくごく小さな文字で記されていたのを見た。

私の子供時代、おそらく小学校へもまだ行かぬうち、世間では祖父の養子と思われているこの巨漢が、青山にあった私の家を訪れるたびに、私はこわくてたまらなかつた。

なにより化物のような身長である。顔もひょろりと長く、子供心にはおそろしい。そして、ぼそぼそとした異様な声でしゃべる。

外から戻ってきて、玄関に、それこそふつうのサイズの三倍はあろうと思われるゾウリが脱いであるのを発見すると、私はそれだけで泣きだしたりした。

父の書いた随筆にこんなものがある。

父が出羽嶽と対座していると、バタバタと足音がして、小童（つまり私のこと）が唐紙をちよつと開き、

「無礼者！」

と叫んで、また逃げてゆく、といったものである。

このことは私は記憶していないが、自分をおびやかした不埒な存在に報復に行つたものと思われる。

父は、「この無礼者という言葉は、おそらく小童がスケさんカクさんの物語からでも覚えたのではあるまいか」という意を書いている。

原っぱのはずれから、立山墓地、更には広大な青山墓地がつづいていた。樹木の鬱蒼と茂る、墓石と卒塔婆の林立する、どちらかといえば薄暗い場所であった。幼いころは、一人でここにはいることは怖くてとてできなかった。

しかし、大人を連れず、同年配の従兄と一緒に、遠く青山墓地のはずれのほうまで探検するのはスリルがあった。見あげるような墓石、あるいは外人の丸い墓があったりした。また立山墓地には、直径一メートル以上もある楠の大木があって、幹にはシノブの類が生えていた。なにかしら神秘的な感じがした。

……父の書斎は階段をあがって左に折れた突き当りにあった。ドアがあり、絨緞を敷いた、たいへん天井の高い部屋で、奥のほうに畳が二畳だけ敷かれ、その和机に坐って父は仕事をした。他に万年蚊帳を吊った鉄製のベッドがあるほかは、すべて本棚、歴大な書物の集積であった。

本棚は周囲の壁に作りつけられ、高い棚の本をとるため移動梯子が具えられていた。そのほか、部屋の中にもずらりと本棚が並び、その間隔は大人が身をせばめばならぬほど狭かった。床の上には積まれているものもずいぶんあった。

父はこの部屋を、二、三の例外を除き、他人に見せなかった。一人、閉じこもって仕事をした。私は父の留守中、そつとこの部屋に入り、なおさらそつと本たちを観察してまわった。墓地とはまた別種の、神秘性がひそんでいるように思われた。しかし、興味というより畏怖に近いものを私は無数に集まりのさばっている本たちから感じた。

（原っぱ・墓地・書物」50・6）

青山墓地の彼方には三連隊があり、原っぱの前の道を、代々木の練兵場からの演習帰りの兵士